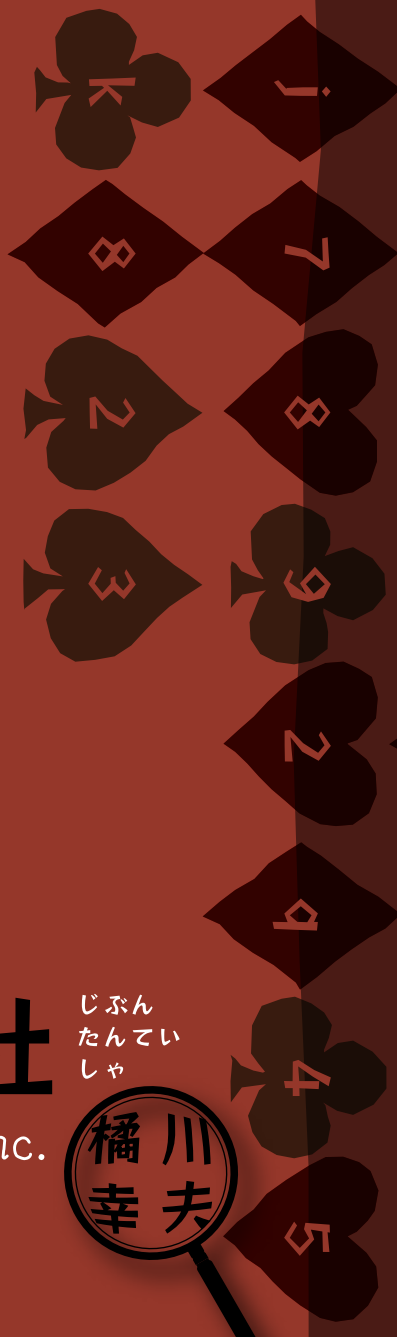


自分探偵社

oneself detective inc.

じぶん
たんてい
しゃ



自分探偵社

橘川
幸夫

ØN・BOOK

目次

第一章	005	ミーティング 探偵という職業 水平生活
第二章	019	ベンチャー・スピリッツ プロジェクトメンバー
第三章	031	家族崩壊 フリードリック 二人の生活
第四章	049	準備着々 3人のプランナー サークルサイト 電子企画会議
第五章	067	団地の空 フリーセル11982 日常と渦
第六章	087	最終決定 ブラッシュアップ
第七章	097	特別顧問就任 第三の自分
第八章	109	事業計画書 中株？ 会社の作り方 取材依頼

第九章 137

第十四章 211

開業
最初の客
調査開始
事務所

第十五章 227

第十章 153

調査ファイル・社長
調査ファイル・父親
調査ファイル・新妻
調査ファイル・宇宙人

第十六章 241

依頼者・自分探偵社
再会

第十一章 165

聖子の取材
現代状況研究会

あとがき 244

第十二章 181

風呂上がり
HOT or COOL?

第十三章 189

依頼者・ストーリーカー
精神科医
曙投資会議

◇装 丁Ⅱ北川 令
◇時代背景Ⅱ2002年

宇宙ウィルス
横型社会の憂鬱

崩壊
自殺
再会

第一章

ミーティング

砂村芳夫と奥野敬一郎は渋谷の居酒屋で久しぶりに会った。「海舟屋」という店名で、創作料理が売りの大衆酒場である。芳夫は約束の時間に少し遅れてきたのだが、敬一郎はうつむくような格好で携帯電話を操作していた。

「すまん、遅れた」

芳夫が言ったが、敬一郎はすぐには顔をあげなかった。うつむいたままで「ああ、ちよつと待つてくれ」と応えた。芳夫はメールのテキストでも打ち込んでいるのかと思つたが、ちらと覗いてみると、メールではなくゲームの画面である。携帯用のフリーセルをやつていて、もうすこしで終了するところのようだ。

「よし、終わった、この画面クリアするのに苦労したんだ」

「フリーセルにはまってるのか」

「ああ、こういう単純なゲームというのは魔力があるよな。子どもの頃、荷物を包む『ぷちぷち』を潰して遊んだことがあるじゃないか、あの感じと同じだな」

フリーセルとは、パソコンのWindowsのOSに標準で添付されているゲームであ

る。トランプのカードが8列ランダムに並んでいて、それを上部に並べていく単純なゲームだ。携帯電話のフリーソフトも、ネットを探すと簡易版がダウンロード出来る。

「そういうのは、シジュフォース・コンプレックスといってな、精神病の一緒だぜ」

「なんだ、その、始終デラックスって」

敬一郎は、売れない芸人のように、わざとはずして答えた。

「あはは、カミュのシジュフォースの神話ってあるだろう。重たい石を山頂に運んで、運んだらそれをふもとに運んで、ということを繰り返すんだ。そうすると、人間は、そういう無意味なことに喜びを感じてしまうんだ」

「さすが探偵さんは、心理学までマスターしてるんだな」

「まあな」

芳夫と敬一郎は、高校の同級生で、その頃は用もないのに毎日会ったりしていたのだが、高校を出てからは、だんだんと会うサイクルが長くなり、それでも数ヶ月に一度ぐらいは会って、お互いの近況を話す関係が続いている。

「その探偵の仕事はどうよ」

「ああ、最初は面白かったけどなあ、最近はワンパターンになってきて、どうかと思うよ」

「まあ、仕事なんて、そんなもんだよな」

「ああ、敬一郎の仕事はどうなんだ？」

「オレの方も、新規事業なんではりきって仕事してたんだけど、1年経ってみたら、なんだか、とんでもないことになってきちゃってさ」

「売り上げが伸びないのか？」

「いや、成績は絶好調なんだけど」

敬一郎は、なんだか、ふっきれないような雰囲気ですーロンハイを飲み干していた。

「すいませーん、うーロン、おかわり！」

「ハイー！」

店の奥から、異常に元気な声の女の子の返事が返ってきて、ちよつと小柄だけど愛嬌のある顔の子が、うーロンハイを持ってきた。芳夫も敬一郎も、ちよつと良い感じの女の子だなあ、という顔をして、見ていた。

「そいで、何が問題なんだ？」

「ああ、それがな、うちはもともと赤ちゃん向けのベビーベッドとかのサービス会社じゃないか。妊娠した奥さんから注文を貰って、赤ちゃんが生まれたらベビーベッドを運んで、

レンタルおむつを定期的に配達するんだよ」

「そうだよな、その業界では結構、古参だよな」

「ああ、老舗の部類に入るな。それで、社長が、新しい事業領域を拡大しようと、老人向けサービスを開始したんだ」

「寝たきり老人向けのサービスだろ。なかなか良い視点じゃないか」

「ああ、最初は誰もがそう思ったよ、うちには赤ちゃん向けのサービスシステムがあるから、そのままの仕組みで、新しい市場を獲得できると。実際に市場はあったんだが、やってみたら、まるで違うことが分かったんだ」

「何が違うんだ？」

「赤ちゃんの場合だと、新生児が生まれてベビーベッドを運んでいけば、その家は幸福に包まれているだろ？ 持っていくオレたちも、幸福な感じで帰ってこれるんだよ。ただ、老人の場合はな」

「あつ、そうか！ 老人の場合は貸してたベッドが不要になるというのは、死んじやったということだな」

「そうなんだ、ベッドを引き取りに行く時は、葬式の後だったりするから、鎮痛な雰囲気だろ。そういう家にベッドを引き取りに行くと、こちらも沈痛にならざるを得ない。その

気持ちが会社に帰ってきてても、伝染するんだよ、社内の雰囲気」

「なんだか、分かるなあ、それ探偵事務所と同じだよ。探偵事務所も、頭おかしい人の相談が多くて、こつちもおかしくなってくるんだよ」

「やっぱりさ、会社を幸福にするには、幸福な人を相手に仕事するのが一番だと思うぜ」

「言ってるなあ、でも、不幸な人を相手に仕事した方が儲かるというのも真理かもな」

「そっだよなあ、でもやっぱり一生の仕事にするなら、ちゃんと選ばないとなあ」

敬一郎が神妙な顔をして言った。二人は、新しく出来たレストランの話題や、ベンチャー企業の噂話をしながら時間を過ごしていた。

「最終オーダーになりますか、何かご注文はありませんか？」

さっきの女の子が、注文に来た。

「どうする芳夫、オレはウーロンもう一杯」

敬一郎は、残っているウーロンハイを一気に飲み干してジョッキを女の子に渡した。

「君、最近入ったの？ 名前、教えてよ」

敬一郎は、酒の勢いに任せて店の女の子に声をかけた。芳夫は、高校生の頃から敬一郎がすぐに女の子に声かけるのを知っていたから「またかよ」という顔をした。女の子は、

ひるむこともなく平然としていた。

「聡美です。よろしく」

「聡美ちゃんか、また来るからね」

「敬一郎、おまえ、高校の時ならそういうのもアリかと思ったけど、今だと単なる親父だぞ、それじゃあ」

「親父じゃねえ、オレは独身だ」

酔いが回ってきて何だか訳の分からない会話になっていたが、聡美は笑顔で敬一郎のジョッキを持ちながら言った。

「お客様のご注文はいかがですか？」

「ああ、オレ？ オレはお水ちょうだい」

「ハイ、分かりました」

そう答えて聡美は店の奥に消えた。

「とにかくさ、芳夫、オレたちの仕事というのを、ちゃんと考えようじゃないか」

敬一郎が赤ら顔をしながら言った。芳夫も、なんとなく、仕事についての不安を抱えていたので、敬一郎の言葉には、素直にうなづいた。

「オレたち、もう『100年の1／4世紀だぜ』」

「なんだそれ、ユーヒーズか？」

ユーヒーズは、「ホフディラン」のリーダーである小宮山雄飛が作ったバンドである。ホフディランは、小宮山とワタナベイビリーの二人のバンドで「RCサクセション」「真心ブラザーズ」の系譜にあるメッセージのある言葉を大事にするバンドであった。

「ホフディランって誰かに似ていると思っただが、あれホールアンドオーツに似ているんだな」

敬一郎が何かを思い出したように言った。二人は高校生の頃にバンドをやっていて、オリジナル曲で本気にメジャーデビューしたとも思っていた。今となっては、あまり触れたくはない話題である。

店を出ると渋谷の町に雨が降っていた。渋谷は、始発前も深夜も昼間も、いつも変わらないトーンを維持している。いくら騒いでも不思議な静けさを保っていて、新宿の狼雑さとは違ふところだ。麻布や六本木とも違ふ。背後にあるのは非日常ではなく、まぎれもなく普通の日常だからだろうか。きれいに清掃された表面だけの町なのかも知れない。

探偵という仕事

砂村芳夫は大学受験に二度失敗した。浪人時代にさまざまなアルバイトをこなしているうちに大学への意欲を失ってフリーター生活を送っていた。ファミリーストランの厨房や、ビルの解体工事のような肉体労働まで、さまざまなアルバイトをしていた。たまたまアルバイトニュースで見つけた千里眼探偵事務所で事務補助のアルバイトをやっているうちに社長に気に入られ、23歳で就職した。大学は入学しなかつたけど、フリーター時代が大学生活のようなもので、むしろ同年代よりはさまざまな経験を積んでいるという自信があった。

探偵事務所の仕事は、書類整理や役所などで住民票をチェックしたり、提携している会社の検索システムを使って電話番号や銀行口座から住所を割り出したりするような作業が大半だった。芳夫が担当する依頼主は個人の場合が多く、企業の総務部関係の人からの依頼もあるようだが、その場合は社長が直接担当するので芳夫にはよく分からない部分があった。

探偵事務所に依頼するような問題は、異性関係のトラブルか金銭にまつわるトラブルが大半だ。社内は常にテレビのドラマのような事件が舞い込んでくるのだが、仕事なのでレビのように無責任に楽しむことは出来ない。クライアントの立場で相談に乗らなければならぬので、クライアントの感情が移ってしまい雰囲気も暗くなる。そして、こう言っ
てはいけないのかも知れないが、探偵事務所に依頼に来るようなクライアントは、性格が偏執的かヒステリックな人が多く、細かいミスを許さない潔癖症な人も多いので事務作業も神経が疲れる。

浮気調査の場合は、相手の浮気現場の写真かビデオの映像そのものが調査の対価となる。基本料金は30万円ほどだが、決定的証拠をつかむためには延長して調査を行うことが多い、普通は100万円以上かかってしまう。しかし実際の離婚裁判で証拠として採用されたとしても、そのことによって慰謝料が調査費用以上に増額されるとは思えない。依頼者は、自分の気持ちが幻想ではなく事実であるという証拠が欲しいのであろう。しかし浮気調査を依頼すること自体が、すでに夫婦としての関係性は壊れている証拠じゃないかと、芳夫は思ったりした。

最初は毎日いろんな人生ドラマに触れることが出来て興味が沸いたが、やがて、どれもが同質のいくつかのパターンに分かれることが見えてきた。痴話喧嘩と金銭トラブルとは、要するに欲望とエゴイズムの争いである。仕事が終わってからの同僚との飲み会などでも、最初はクライアントのネタで盛り上がったが、やがて仕事の話はしなくなってきた。

水平生活

奥野敬一郎は芳夫の高校の友人である。慶応大学を卒業して、育児産業の会社に入った。祖父と、この会社の社長が古くからのゴルフ仲間だという縁で紹介された。新生児向けのベビーベッドやレンタルおむつなどを扱う会社である。一年ほど前に新規事業開発ということで、老人向けの事業展開を始めた。新生児向けのベッドのリースやレンタルおむつというサービスを提供する老人向けに始めたのだ。敬一郎は新規事業の担当部署に配属された。

社長はバイタリテイのあるアイデアマンで、一代で会社を従業員200人余りの会社に育てた。社長が社外プレーンと一緒に作った事業コンセプトは「水平生活トータルサービス」というものである。赤ちゃんとか寝たきり老人の生活を「水平生活」と名づけ、一般の生活を垂直生活と名づけた。「水平生活をしている人たちへのトータルサービスを」が社長のモットーであった。育児サービスで会社の基盤を作った次のテーマは、老人福祉サービスになることは創業の頃からのテーマであった。

確かに寝たきり老人向けの宅配サービスは需要があった。敬一郎が所属する営業部隊も、社長の予定していた顧客獲得の予想を超えた成績を収めることが出来た。しかし売り上げの増加にともない、社内には寝たきり老人をクライアントにすることで発生した暗い雰囲気、気が漂ってしまった。

日々の仕事上のトラブルや社内の人間関係の軋轢や小さい派閥抗争など、通勤をする時にプレッシャーになるストレスもないことはなかったが、それでも全体的には良い雰囲気、職場であった。小柄で小太りの社長は、長年の苦勞の経験を笑顔の中に潜ませた信頼できる人で、敬一郎にも気さくに声をかけてくれた。

しかし仕事のスキルが身につく、社長への尊敬が高まれば高まるほど、このまま良いサラリーマンとして人生をまっとうするのではなく、自分も社長のようにゼロから新しい仕事を作り出してみたくなった。その気持ちは、どこから出てきたのか自分でも分からないが、日に日に少年期の性欲のように大きく膨張していることが分かった。

著者プロフィール

橘川幸夫（きつかわ・ゆきお）

kit@demeken.co.jp

<http://www.demeken.co.jp/>

'50年2月4日、東京生まれ。國學院大學文学部中退。'72年、渋谷陽一らと音楽投稿雑誌「ロッキングオン」創刊。'78年、全面投稿雑誌「ポンプ」を創刊。その後、さまざまなメディアを開発する。'96年、株式会社デジタルメディア研究所を創業。インターネット・メディア開発、企業コンサルティングなどを行う。

〈著作〉

『企画書』（'80/宝島社）／『メディアが何をしたか？』（'84/ロッキングオン社）／『ナゾのヘソ島』（'88/アリス館）／『一応族の反乱』（'90/日本経済新聞社）／『生意気の構造』（'94/日本経済新聞社）／『シフトマーケティング』（'95/ビジネス社）／『21世紀企画書』（'00/晶文社）／『インターネットは儲からない』（'01/日経BP社）／『暇つぶしの時代』（'03/平凡社）／『やきそばパンの逆襲』（'04/河出書房新社）／『風のアジテーション』（'04/角川書店）／ほか共著、編著多数

自分探偵社（じぶんたんていしゃ）

2004年12月14日初版発行

本体価格2000円（税別）

著者 橘川幸夫

発行者 中村寛

発行所 株式会社オンブック

東京都新宿区下宮比町2番26号 共同ビル3階 〒162-0822

TEL：03-5261-3255／FAX：03-5261-3253

印刷所 株式会社情報加工館

©Yukio Kitsukawa 2004

ISBN4-902950-00-6 C0093

Printed in Japan

ON-BOOK

落丁・乱丁本は、オンブック読者係宛にお送りください。送料は当社負担でお取り替えます。

